

長江に消えた母

野夫著



(佐々木猛ほか訳、さいはて社・4400円)

▼著者は62年中国生まれの作家、詩人、ジャーナリスト。本書で台北国際ブックフェア大賞などを受賞。

近現代中国史の虚像に血肉

中国作家野夫の初の日本語訳作品『長江に消えた母』は、古写真から始まっている。モノクロで無表情の顔たちを逐一見ていくと、著者と思わしき警察服の若者が写った一枚の隣に、「湖北省武昌監獄」という証明書にも同じ顔があると気付いた。

表題作は1995年長江に入水自殺した著者の母親の物語だ。一名門令嬢と国民党軍の将官とを両親に持つ彼女は、戦禍により一家離散し伯父の家に預けられ、「下女のように働きながら学校に通った」という過酷な幼少期を過ごした。ようやく父と再会しても、彼は別の妻子を持つ身になっていた。決然と縁を切った。にもかかわらずそんな血縁は、のちに出身階級が善悪判断の基準になった中

国では原罪となり、彼女は一生背負って生きなければならぬ。

資産階級を打倒することで、国民党から政権を奪い取ったという共産主義中国。地主出身である著者の父親も悲運から逃れられなかった。学生だった彼は故郷を離れ「革命幹部大学」で「地主をとっ

ちめて浮財を分捕り、人殺しや銃を扱う技術を早々と身に付け」地主粛清運動に参加する。実家が粛清対象にされたことも、一晩のうちその父と兄、兄嫁ら4人が相次いで死んだことも知らず、「殺人掠奪を行なって、多くの功績を打ち立てた」が、振り返るに堪えない恥辱になり生涯苦しんだらしい。

残酷は人を選ばないもの。善良の「祖母」然り、人生を「組織の

細胞」として生きた「大伯」然り、死の演習中に処刑されるのを悟った「羅小毛」然り、超然と生きようともがいていた「李如波」然り。彼らのような「死」を以て絶望にピリオドを打ったという人生の一方、ほぼ盲目の「劉鎮西」や雇われ料理人に甘んじる「黎爺」など、絶望の中の「生」も描かれている。

天安門事件当時まだ警察官であった著者は学生への弾圧に抗議して辞職し、民主化運動に身を投じた。のちに逮捕され、およそ4年半も服役した。

「官製の歴史では捨てられた物語をもう一度暖かく書き起こした」という彼は、一度あるいは一時期に自らの人生と共にあった家族友人の生死を以て、近現代中国史の虚像に血肉をつけ、「この世の挽歌」を綴ったのだ。

《評》作家

楊逸